

第52回中学生作文コンクール

文部科学大臣奨励賞

生命保険を学んで

広島県 府中町立府中中学校 二学年

沖山 侑子

朝から太陽がじりじりと照りつけ、セミが暑苦しく鳴く頃になると、私たち広島の子供たちは「あの夏の日」を思い、戦争について考える。そして、八月六日の原爆祈念式典での市長の平和宣言、子供代表の平和への誓いで語られる当時の生々しい様子や被爆者の痛みや苦しみを聞き、黙とうしながら

『安らかに眠って下さい 過ちは 繰り返しませぬから』
とあらためて思う。

「あの日」から六十九年。これまでの広島の復興にがんばってくださった人たちや、いま私たちの生活に必要な様々な場面で働いてくださっている人たちのおかげで、水も食べものも着るものも家も学校も交通も、すべてに不自由することなく暮らすことができるのはとても幸せなことだ。

では、この恵まれた暮らしのなかで私たち自身がしなければならぬことは何だろう。それは、自分の生き方を自分でちゃんと考えて、ちゃんと生きることだと思う。

「人はいつか死ぬんだから。」とか「人生は太く短く。」とか人生について乱暴に言う人がいるけれど、それは、人としていけない態度だと思う。なぜなら、今年六十九回目の原爆の日を過ごして「あの日」生きたくても生きることができなかった、たくさんの人たちの無念の思いや大切な家族や友だちを戦争によって奪われた悲しみをあらためて深く感じたのなら、自分には、この生命を大切に、これからもしっかりと守っていく責任があることに気がつくはずだからだ。

生命保険はそのよりどころとなる大切なものだ。いまは十人に聞けば九人は「生命保険に入っている。」と答える時代らしい。けれど、その大部分が自分の入っている保険の種類や保険金の額をちゃんと知らないそうだ。これはとても変な話だと思う。もともと、生命保険は「助け合い」の精神からはじまっているから『とりあえず保険に入ってさえいれば何かあっても安心だ。』と思って、内容をよく考えないで入ってしまったっているのだろう。けれど、保険会社は困っている人を助けてくれる社会福祉をするところではなく、死んだり病

気になったりしたときにどうするかという生活のリスクを保障する“サービス”を売っているところであり、保険はその一つひとつが商品であるということを理解することが大切だと思う。

生命保険のことを調べていて、私はこう考えた。例えば、ラーメン屋に入って、自分がいま、何をどのくらい食べたいのかを他人に聞く人はいないだろう。誰だっけその時のお腹の減り具合と持っているお金を考えて、とにかく空腹を落ち着かせたいから『一番安いのでいいや』と思うか『今日は焼豚を倍』にして満足感を味わうか、足りなければ追加は替え玉か炒飯か餃子かは自分で決めるはずだ。

「生命保険は商品の数が多くて何が何だかわからない。」という人は多いらしいけれど、ラーメンの考え方をすれば、いまの自分に必要な保障がどの商品によってカバーされるかがわかってくると思う。また、ある保険が月々四万円だとして、それを十二カ月の三十年間払い込むとしたら全部で一、四四〇万円となる。これは車よりはるかに高く、人生でマイホームの次に高い買い物になるということに気がついた。そんなに高いものを買うのに、生命保険の営業職員の人に勧められるままに入ってしまったりすることは絶対にはいけないと思う。

そもそも生命保険の商品数が多いというのも、人には健康な人病弱な人、結婚している人していない人、子供がいる人いない人、収入が多い人それほどでもない人、などいろいろあるから人生はほんとうに人それぞれで、それぞれに自分に合った人生のリスクのとり方があるからだと思う。だからこそ人まかせにするのではなく、いまの自分をしっかりと見つめて、そして、これからどんな風に生きていきたいかちゃんと考えてみるのが大切だと思うし、何年かごとに自分が入っている保険の内容がいまの自分に合っているかを見直して、せっかく入った生命保険が人生の心強いパートナーとして力を発揮してくれるものになるとよいと思う。